

明治三十七年六月十一日

卒業論文

覺の性質を概論して美覺

の要状及び

東京専門女子学校文科三年生

島邨滝太郎

第四編

特別
文庫14
A167



目次

前篇、覺概論

第一、物心の關係

第二、覺の性質

第三、知情意

第四、餘論

後篇、美覺の要訣

第一、情

第二、同情

第三、審美心識

第四、理想

第五、及実、現象と實在、形と想、自然美と

藝術美、寫實的と理想的

世見の性質を概論して美世見の要訣及び



前篇

第一、物の世見

通常の世見は、*conscience* (良心) 域内の起
る事、世を根底として、進むとち、
知情意の心の関係は明かち、
世見の本性は、*clear* (清く) は、
心理学者の新解以外、
物の世見は、*clear* (清く) は、
世見の本性は、*clear* (清く) は、

の最後の結論に到達する。知識の自覚を以て終極を
絶対の即ちその絶対性は絶対であることに直目的と
百々といふも不可なり。見るを絶対とする故に其
我の益妙も夢想よりあり。絶対の理想は老人の知る限り
ながら絶対ありありあり自主存在あるあり。其唯自主
存在を理想とせしむ故に絶対は全より見るも分より見るも
其の渾成の一体あり。其の直覚の自覚は大海の
水も澄し葉の露も清し。或はこれを辨下して絶
対何故に全とあり分とありか。然し已に絶
対といふ見るといふ全といふ分といふは直に絶対の我に
あらず。強せば後を直覚とせしむは所謂分行所感
一こそ法同一断つの外なきなり。一然とも推しよるの

如きは利権の事とせしむ。假りの知界に引下りたる絶対
は全を舉げ分を得しむと得しむと前定一たるあり。な
り方便者の絶対あり。全といふ分といふを許すは始
より思議を絶つ。如くなり。思議を加ふり絶対は
美別の事相より帰納したるあり。あることをせしむるなり。
おて絶対の理想自主存在あり。之が直全分の行き
あり居るありとせば。これ絶対は必其一面の手書
を持すと共。他面無限の美別を現せしむるを得ず。
蓋し理想は絶対の相とも見多く用とも見多く。又辭とも
見多く。作佛と目的と作佛と。これとはは。区別
ちけしは。天地は一大法也。して万法は各自性。従て
法也。行くを唯一の目的とせず。何の處に到らしめて

活動するものは何となくも有り然とも万物畢く自主を
目的として活動するときは或は或る放埒の極限に抵抗
するものなるに似て然るにけり然るに自主活動の傍に
抑へて出現するものありて万あるを唯一の絶対の統一
より絶対の一面の自由を許し他面を或る手をも
拒絶してこれを制してとるものありて此の宇宙と宇宙
の別ある所の或る大宇宙は絶対として無限の自由を
有すといふ宇宙は善別の時と制せしめて自由なる共
の或るものを得るなり而して自由性も活動あり然
性も抑へてありしは兩者調和して或るものは或る個體
をあらわすに於ては自主存在の理想は又理想的に
ありてこの宇宙に描きしものは自ら法界の万象

あり佛家には忽然念起の善業相を説く其心と聞け
る真如は直ちに無明を却り頌偈は即ち菩提の階
するの前身を思はば自主存在の絶対が自主存在の
方法を設けるの理も自ら明かありて方法の目的
既に自主存在のありてせば之に別する我々人間も此の
善業相をば出でて人共一我が生の目的を問はば我の
存在と終へんものには善業を實現するものは善別我なり
活動あり善別我一切の作事は他と善別して而して我を
一とせんとするものあり然とも我は此の善業をば何と
物進化する頂上として動物以上の活動は自由発露の
妙用加はりて外界と衝突するものありて其の生活を現
出し物質と相對するものは自ら即ち善別我が録する所

ちんく両者の調諧するに衝突するは情性(quality)の
互に相対の物由(cause)をなせし限り活動として受容(acceptance)
即の両面あるは能はざるに同様(analogy)の如く全く
知を離れざる意(idea)を離れざる知(idea)を
は事(idea)の纏綿(continuity)にありて情性(quality)も度(grade)なく種
の如く二者を離れしは在するを以て一(unity)の如く本
来(essence)の情性(quality)も情性(quality)もその方面を以てし
て實(essence)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
は意(idea)性(quality)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
来る(coming)は(直観(idea))の如く一(unity)の方面を以てしとて其
の目を閉じしは(直観(idea))の如く一(unity)の方面を以てしとて其
の存在として(直観(idea))の如く一(unity)の方面を以てしとて其

其(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
香(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
は(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
の如く(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
活動(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
概念(idea) (intuition, perception, ideas, conception) の
階級(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
一(unity)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
一(unity)の外(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
は(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
總(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其
の如く(idea)の如く一(unity)の方面を以てしとて其

る世題よりこの二面いふは半平等を連続せしめる
ものたる令情の起る種々の境界を導き出すは本来差
別我平等性非動は前記の如く外學の如く
中國より世間より人様なく又差別我より立てて
様もなく他と相對するはさう差別の性をも平等を
一として得るはさう一面より見ればさう及対し他を統
一してこの自己を 差別もさう支天の受けたる差別
平等性の性さ(差別我は統一的対しその性も差別
を統一して平等我の對してさう自己を平等の地
としてさうさうは差別を自己より統一的自己の平
等の境界の地を導き出すはさう) 保護一行又
とさうして(領土) 故にその目的は加勢さうはさうは
意性

一快の性質を導き出すはさう所謂官快 (Plea-
sure) ともいふはさうはさうの服非動と意
性ともいふはさうのほち来るさうの衝動
を統一して意性は益々反抗して其も強まり行
はさうの強まる情は苦痛もさう(何と云ふは意性は
力度 (intensity) たる進めさう及対性の好まざる
ことさう 興奮さうさうはさうはさう) 他は征服さう
と敵口さうはさう一而してさうはさう他方の向い非Aを
非Aとさうさうさうさうさうさうして非Aの更なるAを
以てさうさうさうAをさうの阿附して直ちさうの属す
るさうさうさうさうAはさうを自在中の増及して対候
さうさう一興奮さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさう一興奮さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさう一興奮さうさうさうさうさうさうさうさう

とらまふして同情の底に潜る一神の淨樂は家
未慮を失ふし何ともしは單に他と同情して若くは
「自我」が快味を帯ふことなるは後明を以てせば
あり思ふに同情の快味は平等の満足が反射
する一差別の我を見たりたるよりなり「差別我」兼
「我」の外債と調和して衝突を絶ち平等の
本来の目的の分なるより平等の満足を感じたる
は快味なるは無償の当弊自身の上、事として「費
」の極ちあり故に「反射」して差別の「支」被し
快樂の情となりて「費」なるは、但し「費」は凡て「再
生」の實現せしむるより一「再生」世間とは「我」の
純同情の「行」面なるは「極」難し何ともしは「我」性

の活動盛なりて「我」の性質を知り「我」の關係地位を明
かすとの念強く考へる大平等の同情は「物」は「物」なり
然るの余地は「小」なり「直貴」(Directness)は「直」ち
の「貴」性「起」りて概念を相接し「彼」我の別を生
じて同情は「反」應的の「若」くは「納」廣を「我」即ち親
近の人の對する「反」應的の「若」くは「反」應的の同情及親
近の人の對する「純」同情を「差別」後の同情と云くれば
「審」美の場合の要するは「差別」前の同情とも云く
べく前者と「道」徳的の同情とは「後」者は「審」美的の同
情と「一」事「同」業「悔」の「反」映するの故を以て同
情とは「審」美的の「我」を「中」へ「若」くは「彼
我」差別の地を「立」ちて同情するは「審」美的の「道」徳

的なり一言にて覆へば道徳的同情は美刺母の
事なり審美的同情は平面的事なり其他實際
世間の同情は度の一線一へに範圍狹隘なる
事なり我の満足感へ著る *man's man's* 伊書
的同情は一己の私心をも憐れむるに妙の
境 *境* 同情は事極むるに於て衆生や欲
望やを排弁す *排弁* 同情は瞬間の破
壊 *破壊*

第三、審美の識

審美の根柢は真の同情と同情は前述べたる如く
彼我共の絶対的理想を含むに於て融通無碍な

るに起ると前述べたる如く之を譬ふるる楽器の合奏に
於て音色は別あるも曲の一なる如く調協するの類
なり従て審美の快感は我と物と融れして伍り
平等世界を調するより来る此より此を推すは
美とは我の同情一得んを以て *美* 同情一得ん
の故に *故に* 最も同情一得んは *最も*
ものは最も美なり而して同情の難易の深淺は主
として理想の現不現の度より *現不現* 最も
識の大平直なるは之が為なり 花は花の存在理想
を全し人は人の存在理想を全するに於ては我は花と
も融れましく人も融れましく花の開花時に任せて
私心なきを見ては我も花魂と飄々天地の人間

の思ふ所あり人の教養論教育運の後せし
て悲慘の生涯を嘗て聞かば我も涙を霑りて
天道の是非を疑ふは瞬時は孰しか富貴の同
情の境もあはれや但けり例中亦この分の
れは實は審美の地位を保ち難きものなり
若しは此の永く留るを得て道徳の心蔵の非
難を免くは是れは假令は善境といふ不可
あるを思ふ 對境を劇とあはれて安寧静寂 (calm
contemplation) の境もあはれ山水の美を一服は種
事件も月世を弄りて教へるも泉石花鳥も我手
人向も大平身の眼は美別と見るはなほ唯
生る限りは到底美別地を遠離しんべし

あはれ我と同列なる人間乃至動物の愛する若むを
見ては安寧として純同情の愛するは是れは斯
くして口を舌人豈審美を醜薄無情の心蔵を
手を擧げ足を投じて救拯の方なきは口を
直大及悲大平言はる所以にて審美は善別界
の美を仁愛やと服裁したる平身無私の世間
り審美の眼は是れは草木國土凡て直に望望
あし之れ道徳の心蔵と美と善別を所以にて
道徳の心蔵はあはれは常に美別を徳と爲して
平身の能く是れとあはれ故に孝は万行の奉
隣は徳の始も是れとあはれ富貴の心蔵は美
別を融して平身の即せし故に類陳の

動くもよる事物の自相と魅せしは高きと
能くも其空る所との根干を亦しは我の物と
異別して衝突するに在るもよる物我の歸
すは愛とあり物我の房は無なるの外なる
が故の昔輩はは衝突を除くとして物我の融れ
融解するに在るなり
て言ふに疑はしと老人は積極の立場を取りて知
と合せしめんとす
一に生ずるに在るに在るは言をせば一に知
かゝる事なり
は言ふに疑はしと老人は積極の立場を取りて知
と合せしめんとす
一に生ずるに在るに在るは言をせば一に知

の斬滅一若くは抑壓して以て知を全うせしむるに
鉄はす
一に生ずるに在るに在るは言をせば一に知
かゝる事なり
は言ふに疑はしと老人は積極の立場を取りて知
と合せしめんとす
一に生ずるに在るに在るは言をせば一に知

この一向解ちんとも誠実者の入ることは彼は純粹
なる知識の主あり其が覺内なる一実者男は
直存在を保つし断るは彼は直なる且世間す
る限りの万物より一万物の存在も其のまはは懸せし
る境界へ制するは—— (Schopenhauer's
Welt as will and idea) 也

此輩の所謂平等我は其所この誠実者の入る所
しは平等の平等我が感する快樂の情の然りて
は——このは其痛を積極の地と四圍の根々
たる意の上集する其苦痛消して寂靜無爲
の境に入るも快とも憂ともいへず我輩はこれを
裏面より見て平等我の目的達せしむる故に實

の快樂を感するもあきとす若夫快苦の何れ天地
の幸災の幸もは其の流断する所也のまは思司
的の達せしむるも快と名り達せしむるも
其と名くるの別は従子のし且や——このは我の存
在を思するも故に誠実者の陽分あるは
快して他と喜悲を同くするもなく平等我が
冷るも実者男の哀樂を照破するも止まりと我
輩の見所を以てすは我は全く跡をさするも
いふ音も——この見は其の情となりて実者を
過るも若し知を實者の代表者とし意と
情とも主者の代表者(意)を出立其の我とし情を落
着後の我とす)とすは主者は情の安を以て完

きは快感も同情の激しさを後成せしめて骨子
入るよと一層強しむるを得ず第一一葉の翻る
も同高さは其の舞の句位は低く振りの清
麗あり

同情の復に同情して古来繁りの儀倫も悲
哀に伴ふ快感の後有る一人の道は上未だ
その所なく悲哀自らの快感もあつた他
と同情して平等博愛の目的を成就する
来るもの換言すれば平等我身最高の性情は
理想を現物とせしめて満足する起るものと
するあり一に受けて後を一人感は入は
て情の快感せしむる不快とあるものあり故に

悲感のことも行動するものは行動せしむるに比して快なる
ありといふものあり

悲劇は於て人を娯ませるに足る悲感の事柄
直伶者人の前を現物とせしめては
活気の情性を刺戟し収束するの効はけしむ
るあり

或は又悲哀の同情も其の内を有して之は事
實のありしもの今をほく事よる快感を感ずる
るものあり夫の事實の快感のありしもの
後成せしむるものありは所謂不
安分の中より快楽を想起し来る理由如何

答へて曰く、その妙結果は惨劇を目のあたりに後
のあす、真確な、生きている、外傷を、昂ら生け
る、ぬく、事柄を、描き、あすの、天才や、凡て、感得、を、
事件と、蒐集する、用ゐ、し、藝術、能、や、之、を、組織
する、上の、見、は、い、し、判断、や、は、可、高、忠、ある、才能
が、表白、の、力、節、奏、の、美、を、相、合、し、聴、者、に、上
る、り、満足、を、布、き、以、て、愉快、の、奇、作、を、刺激、す
る、あり、……、は、原則、は、其、の、悲、劇、の、場、合、に、も
悲、劇、は、模、倣、あり、し、の、一、件、を、附、如、し、て、適、應、せ
し、め、得、し、而、し、て、模、倣、自、ら、は、愉快、の、一、え、ま、し、
ち、こ、し、た、ら、ん、 (Anna's Example)
以上、三、の、後、は、一、致、す、る、ま、た、は、M. D. の、直

第一、後を、難、し、て、實際、の、場、合、と、架空、の、場、合、と、を、一、も
相、等、し、た、ら、ん、所、と、を、お、し、し、て、悲、劇、の、快感、は、藝術
の、方、子、ち、の、……、と、主、張、す、る、の、場、合、は、同情、後、の、一
種、の、非、難、と、し、思、は、れ、る、よ、う、な、も、の、こ、し、た、ら、ん、
が、韓、解、は、前、述、の、實際、的、同情、の、後、を、盡、く、藝術
術、も、……、故、に、悲、劇、の、事、柄、も、快、と、ま、ま、す、る、は、あ、ら、
藝、術、は、解、く、純粹、なる、同情、の、人、を、停、留、せ、し、む
る、も、實際、の、場、合、に、は、之、を、我、の、着、念、根、下、に、不、純
……、と、あり、易、し、い、が、烏、も、あ、り、又、た、又、者、の、方、子、も、引
き、入、り、て、悲、劇、事件、の、及、ぶ、る、を、知、る、と、い、ふ、は、快感、を
無、意、味、と、す、る、第二、後、の、……、は、同情、の、高、の、敵、あり、假
と、知、り、實、と、知、る、は、主、角、客、角、の、見、を、以、て、概念、に

上の作用の許した後の事として甲及び乙の出入は
實なる非甲の關係に *disappearance* の非甲を實に
断せしむる確信の (belief) もを用ちゆく程には
確信の如く *conviction* の行動も固く一歩を以て
一歩の日常事等の快感の域を一歩も但一歩を擧
げず其の直ちに極点一轉して故の實を知識に
たらしめざるはたゞは其の全く實をたらしめざる
際的情緒と同の結果の陥りて觀劇の人が舞臺
に躍り出ると亦然をも悔しむる一歩を以て
及實は概念以上の事として非審美的あり猶
是が細流は後章の流る以上の流に似て其の
固執狭きは悲哀の快を感ずる我の所現の悲

慘境の果をも有せしむる *Beauty* (*Beauty's outline of*
beautiful) によれりたる返りて一篇の返りの
appearance の非審の上の所返の思ふも時々事實
の *appearance* も明かすなり一勿論終日劇を看る場合の
如く大なる美由りては其の感は我の身上に及ぶる
ものありたるものなり *Beauty's outline of*
これより悲劇の快を感ずるものは杜撰の返り
たるものなり *Beauty's outline of* 狭隘なる利己
許さず最後は *Beauty's outline of* 所演の藝術 (art) たるが
故に悲慘譚も快ありとは何の義にも *Beauty's outline of*
及ぶる故に快ありとは何の義にも *Beauty's outline of*
藝術の別は
藝術の別は
故に

悲哀の快感伴ふなりといふ海はさへか結ぶの苦痛
の事柄は快楽の形にて表す滑結の主義は
際々々は乃ち快と共とは全く別とありて悲劇の
対するものぬき沈痛の妙味は感せしめざる
一幸来通帝の奇の形と事柄とは相離るる
さるる形は悲劇の事柄は自の悲劇の形あるく
決して事柄は苦痛ありともは表す術は快楽
ありといふはさるる事柄の奇はオセロの海
したる文章結構ありて始めて妙なり故に文
章結構の邊り引離しては小は快あり彼れ
は共ありといふを得たりや若しそのあらんはあり

そはさへ悲意の快感ありて悲しき事柄と
共はさへ音調の二件。集會ありけ種集會は往
こころ滑結を成す人かデステラのあらははて
てまきふよはある輕薄の意味ありま或はさの
意悲劇の想は悲劇の事柄の陳述せらる
る故に快ありといふはさへは是亦直なる悲は悲
あるが故に快ありといふは歸して何の夜明をもあ
るる要する天オや執能や文や調の相集りて
悲意の快味を感せしめたるは相集りたるも
は悲しきもの極極して快きものあるも學
る我を何僅して表すの悲しき事柄の相集り
情の移りてさるる資するあり直他

が、権威を悲劇の要素とすべからざるは多分
に及ばず、ラミキは権威の美術を「腐鈍」
と云ふ所のを復して、藝術をか重んずべし

其等の相や快樂や(権威の)は藝術のより受
け得べきもの、最も奇しくも、一其理由第
一権威の相を娛まへば、其現前せる事物
の印象や対流やを拒んで、其は其れと見ゆる
の、*the* *position* *of* *the* *artist* *is* *the* *same*
が故也、
第二権威の相は、實に人を一其
題目の固有の美を娛まへしむるの、
又卑近なる題、就この外は、其れ其れ
物とは、権一畫たる能はざる、故也、

一第三権威の相は、*the* *feeling* *of* *the* *artist*
相を連する、*the* *feeling* *of* *the* *artist*
事、*the* *feeling* *of* *the* *artist*
け、*the* *feeling* *of* *the* *artist*
ある目的の達する、魔法使用と美術家との同視
する、*the* *feeling* *of* *the* *artist*
の、*the* *feeling* *of* *the* *artist*
が故也、
(Raphael's Modern painter)

要之、宇宙の快樂は、純粹なる同情の快樂にて
審美とは、理想を育して、一切衆生と同情するの

さる所以けありし^レに^レは^レも^レは^レた^レは^レ同意として
理想は差別以前本有の平等ありとも概念は^レた^レ別
以後人間が及者して作りし^レ虚名^レの^レ過^レと^レせ^レ然^レも
直概念を排する^レ世^レの^レ直^レの^レ理想^レを^レし^レの^レを^レ概念^レと
同様普通^レの^レ過^レと^レせ^レは^レ既^レの^レ過^レと^レせ^レし^レ
本より普通の過^レと^レせ^レは^レ理想^レは^レ是^レの^レ試
る^レ者^レ人^レの^レ未^レ本^レ見^レの^レ一^レ物^レの^レ對^レと^レせ^レよ^レ他^レの^レ一切^レの^レ知識
と^レせ^レば^レは^レ物^レの^レ本^レ質^レの^レこ^レの^レこ^レの^レ模^レ型^レ的^レの^レ理想^レ
ありとは如何にして知る^レ唯^レは^レ物^レは^レ物^レありとせしむる
の外^レの^レNew^レ—^レ知^レる^レに^レは^レ経験^レを^レ重^レん^レて^レ然^レり^レ然^レり
する^レ結果^レを^レし^レの^レ知^レる^レの^レし^レは^レ是^レを^レ附^レ—^レ置^レき^レし^レの^レ
が^レ概念^レと^レせ^レし^レの^レし^レは^レ始め^レて^レ模^レ範^レは^レ生^レず^レなり

Platonic idea も^レ究竟^レ概念^レの^レ産^レ物^レなる
ものなり^レ因^レり^レて^レ凡^レの^レ模^レ範^レ自^レ身^レの^レ一^レ部^レの^レ
模^レ範^レあり^レは^レ相^レ應^レあり^レは^レ理想^レ所^レ産^レの^レ一^レ部^レの^レ
六^レの^レ特^レ殊^レの^レ相^レを^レか^レし^レ天^レ地^レの^レ廣^レさ^レも^レ全^レく^レ同^レち^レ
微^レ塵^レを^レと^レり^レて^レ絶^レ對^レの^レ理想^レ完^レ一^レ強^レく^レ輕^レ重^レ
の^レ多^レ少^レを^レと^レり^レて^レ本^レ質^レを^レ人^レの^レ間^レの^レい
身^レ獸^レの^レ類^レ同^レの^レは^レ緩^レ—^レ急^レも^レ差^レ別^レの^レ相^レの^レ
有^レら^レば^レ以^レて^レ一^レ種^レの^レ存在^レを^レ失^レは^レず^レこ^レの^レ一^レ表
別^レの^レ相^レち^レを^レは^レ個^レ々^レ存在^レの^レ價^レ値^レを^レ有^レせ^レし^レて^レ
平等^レの^レ差^レ別^レは^レ的^レ物^レ実^レなる^レ事^レの^レ一^レ若^レく^レは
的^レ物^レの^レ絶^レ對^レの^レ過^レと^レせ^レる^レ存在^レなき^レ概念^レ的^レの^レ
ものなり^レ中^レ間^レの^レ一^レ的^レ物^レを^レ傳^レり^レて^レ之^レの^レ模^レ範^レ的^レ

行く其一定の調子あり、形は高き性別とさか排別の
の趣ありとありとせば概念とは性別中の一種のしるべき
区別ありとせば明瞭ありとさるものあり、理想の女性
別の如き、おぼろげさから全体を調教したる形式
あり、譬之天地は一大音楽場なり、あり、百種の樂
器は己が自々琴々鐘々の音を奏せしむるも、直曲一な
るが、あるは相合して平言易言、差別、妙調をなす
又は天地を沃草と青きより、は音楽の曲は沃草の趣あり、
形あり、音色は沃草の性質あり、あり、概念は音色の
用、性質の依り、是る、理想は曲の、ある、所、趣あり、
の所、是る、故、概念は彼女の關係を離れ、
とも理想は全体、とこの外、之を、後、く、理想、理想

は必竟直書の事、一、且、抽象されは直書性、
す、一、琴、の、甲、曲、を、調、三、結、の、も、甲、の、曲、を、彈、
と、さ、し、理、想、は、聞、く、は、傳、の、就、平、言、の、曲、の、
甲、有、る、是、の、於、に、唯、一、あり、
三、結、の、甲、曲、と、は、甲、曲、と、別、ち、い、は、し、
お、つ、ち、の、抽、象、の、あ、ら、は、独、り、概、念、の、是、の、三、結、
と、三、結、と、結、ち、な、り、た、し、別、ち、な、り、故、三、結、の、甲、曲、
を、先、せん、と、い、ふ、し、の、存、在、の、上、に、は、何、の、關係、も、な、さ、
事、人、の、理、想、と、い、は、事、人、の、所、以、の、全、相、ち、事、人、
の、概、念、と、い、は、事、人、の、常、に、有、る、清、性、質、の、結、核、の、
進、で、人、向、の、理、想、と、い、は、多、數、の、的、人、が、團、結、し、て、
實、現、し、た、る、社、会、の、我、て、之、を、一、貫、し、る、命、運、と、指、す、

この外にけいとい人の概念といふは諸多の人の共通
ある諸性質の合計を挙げ得る一物に我々の
理想と呼ぶものは各物の各物として出現する故に
即諸性質の形式としてこの所謂個想より
し且類想は之を概念の二層の一として理想と言
はざる一理想は到底不可成あり已むと云ふは
之が形式として美刺の調和ありといふの外に一平
物の中を合する一部分が美刺を著しく一善人
平正の品よりなる理想の心も善人想を一善人の
といふ人の身作のありけり
理想は萬の天地の流行するも其本は百のくも現不現の
度として何の度量の事物を~~成~~成あり一物として物と云

の階級あるは六の理想も現の度の種ありといふ一物
の性質は何物なるか一猫は猫の階級あり一善
人は人の階級あり一善人かくて自然の産物
あり限りは度あり一種あり自然の存在理想も
現する一経一其の徴も善あり一自然は
善の無量蔵として絶対は無上の大美あり自然
の醜い善く様なるは其の善も善く一善人といふ
は自然の自然の純粋なる醜のなる一善人といふ
造化の善を現せしむるは自然の現あり一善人といふ
は自然の醜い自然の善の理想の善を自然の善
と云ふといふ一善人の別を生むと復けり一推する
天は本来無量の善の理想の善の理想の善

園よりこの事感して我を失望の例に於ては
の既述の如き思ひなき善善道一に相偕して斯の淨果
を著くるは我の徳の勝るるに非ざる也又所謂腹實
あるものを我ありて知識する上の事とすは此の如し
の如き腹實の方法は此の如き結果を別
達するを難し何と云ふは此の所謂腹は主青
を指すものなり其方法は即ち主青の腹に入る
用を著せはあり獨之を明せざるは主青の腹と
客青の腹の別を説く事なり其の如き客青の腹と
は例へば画山水の對して其の高く水流るる如く
見せらばは腹して實は平板の丹青の彩を施せし
ものなる事と知るなり客青の對待して存す

る腹實昂ち第二存在と存在する別を知識するに
り主青の腹とは之の如し画の如き事なる事なる論
く客青の如く月を山水の形は主青の如く
して客青の實在なるは分子の運動の外なき事
知るなり客青の現象を實として主青の現象を
假とするなり(一)此の絶対的現象といふものは又別あり
假二種類あり(二)此の如しは術算の
特長なる官覺間の矛盾の類し實を腹して直ち
の如き主青の腹昂は腹實を得るに非ざる也
何せや画山水の如し眼感は山水となり
感は平曲の紙幅となる場合を来るとは結果
は山と見せし景を主青とありては

and reality)とを相対せしめて審美は実在を去り
現象を純くしありとし比目的を達せしめたり
造化の眼耳の両機關を人間の附屬し実物を離
れしる形を艺术的の我より作り得せしむ
とししるは其所謂現象は眼耳感の作り出
す所の形をいふなり

現象が審美的なるを得るは一切の實在の關係故
望を有するはとなく之を全く離れしるを得
るに由るなり
一 生活する人が同享する画美人
は一時の多量の快樂を享受するに過ぎざるは
事實ありともけし人の感念は吾人の形の心を他
にせしめし見るに過ぎざるは故に純粹なる

審美感の自らを得ず繪画は人生命は現
象(形)のなす實在は想の在るを常とするが故
に美を有するは空易なるも実物ありては
之に就て純現象の心を有せしめは始より現象
の繪画に比して幾層の審美的習養
を要するに在り (Schiller's Aesthetic
Letters) 也

眼に眼に見耳に聞くより心が現象を以て他の
官能を以てするは意識は之を全く別種の屬し
まは何故がやせや声やの主要の産物ありは香
も觸も自ら主要の産物なり天地を一大快楽の
とせば眼耳は微妙の活動を傳へ鼻舌は粗

大の伝動も傳ふるの善あるのこぼれかか一人が一物を
見るといふも單に眼感のみならず所をいふも傳へるに觸
覚や味覺やの經驗せしむるに連糸せしむる如し
て一物に傳へ一傳へしむるに可なり何れも官覺傳動の
は及ぶるにせしむるに在るに在るに可なり何れも
視聽傳動は形に屬せしむるに味觸傳動は色に屬
せしむるに傳動の前者が主なり其の何れも
見るといふ(Perception)の理に則ちあるを見
しむるに及ぶるに眼耳の精細に則ち直らる他
官の經驗は傳動の外に傳動の全物を傳へし
傳へしむるに味觸の如し其の官覺傳動の如しは

最も著しき活動の升る傳へしむるに故に熱い全
身の見るといふ理想をいふに熱は熱なり其の熱
と快の熱とをいふに用ひるに用ひるに用ひるに用
ひるに用ひるに用ひるに用ひるに用ひるに用ひる
の平に限りの全形を直覺するに得るに可なり官
官傳動の全性を直覺するに難しむるに官家の
平に所は會の事と別しむるに直接に我
の官覺の判斷をいふに用ひるに用ひるに用ひる
の官覺傳動は直覺するに用ひるに用ひるに用ひる
の形に屬せしむるに用ひるに用ひるに用ひるに用
故に官覺の如し其の眼官の如し其の官覺の如し
の如し其の官覺の如し其の官覺の如し其の官覺の如し

の立論なりせば、理的考察の果して然らざるべしといふ
の外、一歩引いて、眼官のこの入るべきは、天地は
是れ、知の起るべき地ありて、距離や、容積や、知識
は得るよ、由らざるべし、是れ、論の所ありし、今日
世人の、實を得る、真の官能、世間が審美の、恰好
るは、如く見、微妙の活動と、粗大の活動と、平均得
るよ、由らざるべし、言の更なるは、真の官能の、平す、
と、觸官、味官、などの、曾て、實得の、所と、直接なる
微妙性と、間接なる、粗大性と、實用の、遠く、より、直
視と、實用の、近き、より、複視と、強々、審美的と、弱
々、非審美的と、を、連続せしめて、全相を、現出さ
るよ、由らざるべし、方言、官能、是れ、恰好、と、是れ、洋行、して

益、實際、昇る、階、格、より、こゝに、よ、以上の、諸、難、点、を、
よ、として、考へ、自ら、見、所、得、の、現象、を、よ、は、結、ぶ、我
の、直、覺、を、探、さ、出、さ、さ、る、事、物、の、全、相、を、し、て、は、
實在を、離、る、は、早、審、美的、あり、よ、の、歸、す、現象、已
の、直、覺、の、平、面、あり、と、せば、よ、の、對、する、實在、は、よ、
よ、も、なく、実、在、の、直、覺、實、体、即、共、働、の、所、得、外
其、の、活動、あり、よ、の、よ、の、實在、と、現象、を、よ、の、理、上
に、別、を、附、する、は、女、あり、よ、の、實際、生、活、を、取、り、よ、
現象、を、直、る、は、實在、を、し、て、色、を、受、し、香、を、受、する、は、
色、と、見、し、香、と、見、する、は、分、我、の、快、は、あり、実、在、
に、ある、よ、を、檢、査、的、に、ま、審、美、の、納、め、得、た、は、よ、と、
致、す、よ、の、た、る、よ、の、法、を、啓、する、よ、の、難、し、さ、は、

よ言へば若干の人物が自らの生活を述べたところの相合
て一社會とらるるしく存在を描き出し以て絶対の
自主存在の理想を形勢形勢せしむるときは理想と
想とをけつ之が材料となりて知識なる面をば一切
形とをくさちしは意味の想とは老人の知識
よておけ得るまゝの経験と重値しを認めし
之の到達し得るまゝの差別我の活動は且係し
よも得るまゝの理想の想は唯直者得
く且受動的形式的として事物を之に援よ
ま僅る差別我の情性之快苦の影射を生ぜ
しむるよ從て到底定着したる名を附し得ん
かゝるるよを謂ふ意味と理想と想との我あ

るまをけのめし而して昔の味の想の中文形と事柄とを
討せしむるは感あり一連の想として取らるるま
は相待て如く全まの直覺の能を成就し得ん
の例は夏草や兵士の情の句はたし
文調の自の悲涼は事柄即意味の悲涼あり
と并行すべく二者相成りて直覺はたしよる想よ
念し若くは必要連起しまの清多の心を映出
し以て名を荷しつる一團の現象を古まらるる
ちり(文の草率)の使を事柄の外にたすは音楽
の楽調の如くしはけは論議するを得ず(故に未入
は女義)この形想其他凡て書寫の瞬間は如書入
入るよまは打りて一とあり事柄と名けて別れ理

(読家へ語るもせよ) 著者の胸中へ未往するその
とちうと力せしむるものか、或は是は美術を哲學の
奴隸とすする終りか、此の所謂「匠」のちやい匠
のちやい匠「美術の本質は是れなり」
審美は卒と概念を同位するをあらわす
はけの清見多きを要せしち獨一例を授きて
之を明かすべし、八丈傳の全篇若し美ありとせば其
美あり、所以と一言の概念例は因果應報や仁義礼
智やとは何の関する所もなく、美原は之等の組織
する形式なり、全篇を起伏する事柄が八丈を中
心として、融れし入向の一部の命運を、宇宙的
の境をあらわす類なり、八丈は、代々の持徳敗倫

の入を以てするも(実情を激成せし限) 美あり、
其の美ありし要するも、批評の眼する見出し概念
も必要なるものなり、審美の職は用ゐるに
こゝろを以て形相の論は事柄と理想(事柄全体と表
さ)の区別を備せしむるなり、形相の比例は保飾
は後段の譲るべき事柄の終り、臨び一考するは
連念の譲るべき事柄の連念も、美の性質
上、美の性質なり、我より力ありて来るもの
の二大別なり、其は審美の上の許す、連念は第一
者に限る、其の直覚なり、概念を移るは、第一
二者より、知性的連念は多く、其の属するは、
審美の性質は卒と、我の跋扈を以て、故に効

めし我々とする連念をば隣りたるが唯其の対境
がはたして能く繪に於て畢繪の場合の如く極めて簡
素にして多量の意味を筆外に保ちしむるものあり
は直現念の口僅々なりとも之が中心を以て美的句
位より雜多の念を連起し其を一筋にして直覺
篇を完成するの要あり之を完結性とするが然る
の聯合を以て種々の連念は奔動的の如きにして受動
的あり受動的の如き故に審美界に入りしもの之が實
を占すたると一理想といふは其の類はは注
意の変形として奔動的の八方を音を散せしむる
ものあり故に審美界に與るを得ず又その自らの
歴と連想せしめし故に快あるものも審美的あり

が審美界の連想は獨尊大と大業の如し獨尊大一脈はは
力を用ひて一刹那の如く操券す一十文字の如
くも缺く天地の美を藏く一得はは獨尊大線は
觸るはは獨尊一は人の神来の會するものもは獨尊
大線は達して全く受動的の無限の妙相を連起
し得るははなりサレが美感の三要素を説きて連
想も其まあるものもは可成りともは受動的の連
想とあり連想して藝術家の才能造化の手紙は
及ばんとするは其人の取らざる所

……其人は藝術家の才能を歎美する同情の
からざる美感の中を感ずるもの故に特に入工の
美を嘆仰するに至るあり以て藝術の美の感

我の別を去り、我の形式は彼の、彼は彼の
内容に我の、合作し、主行、動を、
ないて、看、弄、の、能、事、は、了、す、ま、あ、る、こ、の、積、極、
的、の、方、法、と、い、ふ、已、む、を、得、よ、う、と、願、ふ、の、我、は、
機、の、乘、り、す、ま、あ、る、は、用、事、す、す、け、れ、ど、裏、に、ま、ま、で、停、
ま、る、の、我、は、空、易、の、教、く、ま、あ、し、弄、術、の、妙、は、定、ま、り、
こ、あ、り、所、詮、消、極、的、は、審、美、の、大、業、を、積、極、的、
の、甚、深、微、妙、な、ま、ま、弄、つ、て、や、ま、り、何、れ、に、
術、は、積、極、的、の、弄、別、我、を、対、境、の、同、ぜ、い、の、得、
る、か、他、な、し、自、然、を、醇、化、(Idealize)して、理想、と、
事、柄、と、想、と、形、と、の、権、衡、を、変、せ、い、め、に、想、を、
著、く、ま、る、こ、の、事、ある、の、こ、し、但、一、理、想、の、最、も、美、く、

實現、なる、操、業、は、飽、く、ま、る、も、自、然、を、一、身、の、身、た、り、花
の、花、な、る、所、以、口、利、首、自、然、以、上、の、ホ、も、か、が、若、一、植、物
の、階、級、の、あ、る、こ、の、事、物、の、階、級、を、見、は、ら、る、理、想、を、
人、間、が、附、興、し、ま、る、や、う、な、も、あ、る、は、亦、怪、し、い、と、成、り、し、る、
一、ま、が、故、に、醇、化、と、い、ふ、決、を、解、して、身、を、身、以、上、の、想、を、
附、し、花、を、花、以、上、の、想、を、附、す、る、の、謂、は、あ、ま、り、な、し、
(斯、く、い、は、る、と、類、想、を、審、美、界、に、入、る、こ、は、あ、ま、り、な、し、
の、心、的、状、態、と、看、美、家、の、心、的、状、態、と、は、別、を、い、は、ら、る、)け、
に、た、ま、か、知、る、し、弄、術、の、醇、化、は、積、極、的、醇、化、と、い、ふ、
一、こ、の、事、を、消、極、的、醇、化、と、い、ふ、を、積、極、的、醇、化、と、い、
固、有、の、理、想、を、更、に、幾、許、の、理、想、を、加、え、て、之、を、明、か、
こ、す、ま、る、を、謂、ふ、や、消、極、的、醇、化、と、は、固、有、の、理、想、は、

之を傳へて其の得たるも形減して想減せざる
が為め理想の発揚するを得たり絶対は且所
現の万象以上の区々の人巧を以て一真の想をも加
ふるを許さず花身は幾たび畫くも真の花身の
を得て花身の一を得ず美術は人巧といふ皇を以て
先一着を自然の産物と輸する有り然とも且自然
以下に著る所は形にて却て之よりこそ美術の真
術なる手腕を揮ふこと余地を有す有り自然の
産物は形五十想五十の調和の時(あるは實際上野
心の如くいふを得ざるもと便利の如くは)數式を用
ひたる(しめとせし)想は五十を超ゆること試はる
る形たるに幸来五十あるを能はざるもが想を五

十に近かりしは美術の効も大なる事なりはの如く
形は三十四乃至は五十一の界を離れざる
が美術の本領にて其輩の消極的醜化とはこの
外ありず而して且如何にて醜化せざるかは天才の
事其輩の徳(徳)たる所ありけり此れも
想を真くし事柄自然なるも全島の趣きを著く
し活動の性質なるも之が形式も明なる(樂卷
の聲にて曰はば音色よりも曲調を耳するに似て
おのづかしく我と相通せしむるは音性動かしむる
同様の実琴り審美界の境に入るを得し要之自
然は形想五十五の配合にて美術は三十四と五十
の近きもの配合なり而かも其美を觀するに

忠あるものとおさらすからす。然とも寫實の本意は
のめりとせば美術は到底繪られたこの體面、劇
に於この信劇を直極所となすの外あるべく及び
に非凡の巨腕ありて形想共の五十を博し得んが
とすも之を看るよびは數敗りて身の實境
に臨む思をなし悲喜哀樂一々實情を寓かし
まらざる終るしはのれく人任を好んでか、美術を藝術
の求むくや去て自然を娛むの勝るる如かざるあり
美術の美術なる所には想の自然を分りて
形の之と違ふよあるに由るすはあはれ、
凡手の作家たるは漫の形の之を追ふて想を
五十に復すたを純はるるたともあはれ、
たを

や完全あるものは自然美を擇ぶ所なく不完全
ものは活氣ある寫實一般たるの結果に到るなり
とせば極端なる寫實は美術の本たる遠ざかる
は明からるし感は人事を描するきく物質的
の面も忠實の寫すと精神的の面も忠實の
面と平行し得ざるよし寫實とは物質
的の方を寫し精神的を疎するよしと考ふ
べし之は非ありし果して完全の物質的
作を寫し得んは精神的動作は必無之
の伴ありしものなり物といふも別種あり
たは前記の所の如く音人の形といひ實と
りし中は精神的作用即脳活動の有様は

は女の念をくまひのこして物故實的作用を離しては
合理的作用も知るを得なくしてさうさうか分ちあつた
想といふ理想といふものは法として單に精神的経
路の通りはあつた 物々調和して何の人間を造し
人間が行動する者であるとは直覺のうちに幅を
あすけ幅は形あり実あり理想とは之が全
幅を溢るゝ自主存在の類であつて半手即ち美別
の形式あり精神的作用は實の一部を知る
しは之を理想的とは何ぞや其所にてもよく概念を
純粹の理想とは分別せざるべからざるを作家の上
より見るゝ事柄を組立するゝ必要ある概念や
意匠やが作家の心内の運轉をあらわすものなり

さうは論じ及ばず概念的理想的は口外にせよ
よく組織せしめし事柄の上へ更には自家の抱
持する所見即概念を隱見せしめんとするあり
さうといふ種の理想が審美と異なり是れは
後になりて之が作物の面よりいふも概念的の
得として美あるも徳ありとせば見事なるは概念
の是ははらひからざるもさうして作者の心着意せざる
向に理想の境下なる曲るゝ大傳は馬琴の儂
教的所見よりして審美的なるものと能はず失樂
園詩はこゝの清浄教徒的善念よりして審
美的なるものと能はず審美の眼より見れば
概念と美術と何の関する所もなし弄る傍

よき隠約たる作者の看念を認め作者の人物
手腕を嘆賞するは批評家の地立ちたる事な
りさて概念画を以てかく審美界と對せざるも
のこゝに理想画を引くべきことは刺す刃は前
この極端寫實派の正反對に立ちて只管理理想
を主とし形をば二十三十の低處より下して顧みざる
よめりば身羽繪のやま一画あるのこゝに形が想
をまこし形を重しせざるの極端な美術を記
号し近きものも整然たる寫實派が美術を
心づつて歸せしめんとするの弊と程度なく其極
端をきらたるといふことさういふことさういふこと
を比較するに理想画は想ふに教へ満ちた

ば形はいふよきものとして画の極端は想の十分ある
も望まざれば形も十分あることを要するとして西者
の理想の円満を期するは異なることなし且形
は自然と全く合せざるものすといふは是れ於て相違
行するのこゝにして西極端が其の美術の本旨に
あつては右の論せしめしきは美術家たるよ
は究竟何の地立ち命するか難皮みやげの傳へて
行く

つらく云くよく 理法の寫し一う事もあるは
念とせぬ世の中、むかし流りよる事よ、世清
取らぬ事多し、さうはさう、歌舞伎の従者な

ども鬼角眞所作が実事な似るを上手とす。此役
の家老職は卒の家老に似せ大衆は大衆に似るを
とらて第一とす昔のやうなる子供なましのちぢや
らけたる事はとらず近松弄つて云くけ侍たしやう
ちぢい日藝といふものゝ虚実のらたのこを知らぬ
後たり藝といふものは実と虚との皮膜の向である
ものなり！虚よりして虚であるが実よりして実であ
らうけ向の感があつたものなり……生身の通り
をまぐは真すといふはたとい揚貴也といふもた
りのしるる所あるし……以故書画さうさうといへ
直像をまぐはくとも又本まがむよも正真の形
を似する内は又大まかちる所あるが終る人の愛

する種とはあるなり。種分もけのせんとすの事な似る
内は又まかちる所あるが終る藝といふなりて人のちぢ
さうなるものなり。たのせよちぢもけさうなるものなり
是のいふ事なりし

流るゝ近松が幾年の経験からして得しものはあ
決りよく眞実な理想の流の調和を自得して
筆端の至極の契合なるものなりし。その虚実
の向といふ実事を似て大まかちる所といふは貴人
か自然美と藝術美の關係を論する条よりて
述へし形四十想五十の比例を合する境を指す
ものなり。是は形五十あるものなり。虚実の
向とは僅かに五十を下りて命の三十三の長

いふことなきもの有りては良家の子女が喜ん
の前の抗顔情を後くらぬきは実降にはあ
らう事あるも之より直くおの特性を實に
度か全解を通つての利益に比しては、あるは
綴ひ多サ実の遠かるを痛とするは、斯
くしては、は極の事柄も融れし渾成して詩
歌の趣を寓し藝とも慰ともあり得るは、は
之を極端にして後の作者言が帝の形は、
自然の遠かるのしきも、想をも十千の低級に引
下して顔のすゑの敢漫なる夢の幻劇を後代
の遺つたるものは、嘆かしく蓋し形の下の共
想も下るを得るが、帝の場合る人は非常

の半解あるは、限つた想の円備といふは、
頭の圓つたる標準として、虚の過りの度を制せ
ざるは、可憐な理想の極の美は、度のよ
り、虚度を知らして之を調和するは、作者の文能の
属とし、董文敏の画禪室隨筆の画中の虚実
を記す

虚実者、右段中用筆之詳畧也、有詳
處、必要則有具處、實虚互用、疎則不
深遠、密則不見韻、但審虚實、以意取之、
畫自奇矣、
とくとも又實は清身の外ならず、疎なるが別ち
深遠なるは、は形の少くは、過りて想從て揚

くが、たゞは深家の同情を蒙る復らざる調あり
密ぢは則凡庸ありおとは形、多々こゝ過ること
想の著りたるを滑り極端的理想の弊
と極端の眞実の弊と虚実のある所を審
み、意を以て之を取らば其の美術家唯一の務
めありしやんか。

